

## シンポジウムの開会ご挨拶と趣旨

(永田)

皆さま、こんにちは。未来の図書館研究所 永田治樹と申します。

本日はお忙しいなか、また足元が悪いにもかかわらず、私どものシンポジウムにお運びいただきまして、大変ありがとうございます。

知識を図書に託して人々をつないでできました図書館は、社会を支える基盤として、個々人の暮らしやコミュニティにとって不可欠なものであります。その図書館の発展のために必要な調査研究を行い、また皆さまのご相談などに対応できる組織が必要ではないかと考えまして、私どもは本年4月にこの組織を立ち上げました。

これまで半年ほどの間でありますが手探りで活動してきたところあります。今後皆さまのご関心を一層集められるように精進していくつもりでございます。どうかよろしく願いいたします。

お手元の配布物に研究所のパンフレットが入っているかと存じます。そこに連絡先等が記してあります。いかめしい組織ではございません。お気軽に声をかけていただきますと幸いです。

さて、本日のシンポジウムでは、私がコーディネーターを務めさせていただきます。改めてよろしくお願いいたします。

本日は、200名を超す皆さまにお越しいただいています。最も大きなグループは、公共図書館に勤めていらっしゃる方々です。そのほか、公共図書館を運営している地方自治体の方、あるいは大学や専門機関の図書館にお勤めの方、さらには研究者、そして出版社、あるいは図書館にかかわる事業を行っている方など、多様な方々のご参集をいただいております。おかげさまでシンポジウムには好都合な幅広い構成になったと思っております。

本研究所のシンポジウムのテーマは、やはり未来の図書館に関するものでございます。今回は、これまでの図書館の在り方をとらえ、そこから未来を展望しようということで「図書館のゆくえ：今をとらえ、未来につなげる」というテーマです。

一年ほど前ですか、会社を立ち上げるにあたって、未来の図書館がどんなふう議論されているか、あれこれ調べておりました。その際、気づいたことがございます。図1は、米国のピュー・リサーチセンター研究センターのリー・レイニーという人が未来の図書館を考える際に必要な観点として挙げているものです。未来において、知識はどのようなものになるか、未来における知識はどのように獲得すればいいのか、そのためにわれわれのコミュニテ

## 「未来の図書館の問題」

by Lee Rainie

1. 未来における知識
2. 未来における知識への経路(レファレンスの専門技術)
3. 未来における、公開技術、そしてコミュニティを支える機関
4. 未来における学習「スペース」
5. 未来における注意点
6. なにが図書館の売りか
7. ダッシュボード(物理的⇄仮想的、個人フォーカス⇄コミュニティフォーカス、コレクション⇄クリエーション、ポータル⇄アーカイブ)のどこに位置づけるか

図1 未来の図書館を考える

イにはどのような仕掛けが必要か、あるいは未来の学習スペースはどのようなものになるのかといった問いかけがなされています。いうならば図書館がこれまで果たしてきたところから未来の図書館というものを展望しているようであります。未来の図書館の議論は、さまざまところで行われていますが、大方このパターンでして、図書館がこれまで果たしてきた役割を確認し、それが未来においてどのように展開されるかという取り上げ方をしております。

このように、未来の図書館を論じるには、まずは、これまで図書館が果たしてきたことをきちんと見極めているというのが前提であり、そのでき具合が図書館の未来への洞察の確かさを決めるといいと思います。

ただしこの側面だけでは、未来の状況は設定できません。事態の変化、具体的には情報技術の進展、あるいは社会の発展状況などを予測しておくことも必要です。そうした想定をしておかないか、これまで重大であったようなものが、実はもういないという事態も起こります。未来の芽吹きをとらえておく必要があります。したがって、これまでのあり方、それに変化の兆しの双方の観点を抑えれば、未来の図書館というテーマは、ある程度妥当な展開ができるのかなと思います。

本日のテーマは、このうち第一のものをできるだけ解きほぐすこと、図書館の役割についての認識を深めておきたいということでございます。

また、この図書館の役割を見極めるという作業は、単に未来の図書館への洞察だけでなく、現在の図書館のあり方を改善するヒントにもなる、いいかえれば、未来の図書館への地ならしの作業ともなるものです。

さて、図書館が果たしてきた役割をとりあげるのですが、よくあるように建前レベルで論じてあまり実のあるものは出てこないかと思えます。それに第一、面白くありません。そのため、このシンポジウムでは実際に事態を変えてこられた方を講演者としてお迎えしております。

最初にお話しいただく渡部幹雄さんは、プログラムにもございますように、現在は和歌山大学附属図書館館長をなさっていますが、そもそもは大分県の緒方町立図書館、それから長崎県の森山町立図書館、さらには滋賀県の愛知川町立図書館(現在は愛荘町立図書館)の館長として、新たな視点からの活動を展開し、地域における図書館の位置づけを変えられた方です。私も渡部さんのお書きになった『図書館を遊ぶ』(新評論、2003)という書が大変興味深く拝見しまして、こういう図書館づくりがあるのだということを、そのとき思い知らされました。その後、渡部さんの図書館を調査させていただいて、おかげで論文が2本書

けました。そんなこともございましたが、本日は、「図書館の潮流と今後の展望～質的な充実と普及～」というお話をいただきます。

それからもうおひとかたは、吉本龍司さんです。皆さまご承知のカーリルを主宰されている方です。カーリルについては今更、説明する必要はないと思います。図書館界というよりも、図書館資料を検索する人々にとっては欠くことのできないシステムです。端的に言ってしまえば、日本の図書館界の Google のようなものであります。

8月の末に刊行された『日経ビジネス』に吉本さんへのインタビュー記事が出ておりました。その記事では「使えない検索システムを数年内に駆逐しちゃおう」という吉本さんの主張が紹介されておりました。皆さまは、わが国の公共図書館に入っている図書館システムがどの程度のものかお考えになっておられますか。残念ながら吉本さんのご指摘のような状況です。公共図書館が大層なお金を払って導入したシステムの内容は、先進国の水準からいえば、全く遅れたものというのは確かです。この状況を早く脱却するためには、私どもは吉本さんの力を借りなくてはとっております。

ただし今回吉本さんにご登壇願ったのは、システム技術の話ではありません。今をとらえるには生のデータによってその実態を確認していくことが必要ですが、吉本さんは、カーリル・システムが日々産出するデータをもっていらっしゃる、膨大なデータから日本の図書館界の現状を手取るようにご覧になっている、それをご紹介いただきたいと思っております。そこで「ウェブサービスを通じた図書館サービスの提供—そして未来の話」というタイ

トルでお話をいただくことになっております。

私どもが描いた本日のシナリオでは、渡部先生からは図書館経営という観点からみた図書館の役割についての基準というか質的なデータにまつわるお話を、そして吉本さんからカーリルを展開するなかで把握されている量的なデータを踏まえたお話をうかがえると考えております。

お二方からのお話を45分間ずつ、そして15分の休憩を挟み、その後15

図2 ディスカッションを収斂させるために

時半から1時間ほどのディスカッションを設けております。ディスカッションに関しては、時間の関係もあり、なるべく議論が収斂するようにしたいと考えまして、図2に示すディスカッションの論点というものを用意しました。その論点に従って進行したいと思っております。

#### ディスカッションの論点(案)

1. 図書館サービスはしかるべく行われているか
  - a. 必要なサービスが用意されているか(例: コレクションの適正性, 学習支援, 時代に即したサービス環境整備)
  - b. サービスの普及に配慮があるか(例: 登録者の拡大, 非利用者の取り込み)
  - c. サービスは公平に行われているか(例: 一部利用者の優遇は避けられているか, デバイドへの配慮)
2. コミュニティへの効果は考慮されているか
  - a. 人々の図書館に対する受けとめ方は把握できているか(期待と失望)
  - b. 図書館でコミュニティへの貢献が議論されているか(どのような貢献をめざすのか)
  - c. コミュニティは十分に図書館に関与しているか